

35 五郎兵衛用水跡



指 定 県 史 跡 昭和58年12月26日
所在地 望月・浅科
所有者 佐久市・国土交通省

五郎兵衛用水路跡は、望月協和地区から浅科甲地区までの、延長約5里（約20km）に及ぶ農業用水路跡である。寛永8年（1631）から使用され、昭和44年（1969）4月、県営御牧原農業水利改良事業が竣工するまで、実に338年間、農民の命をつないだ用水路であった。

上州南牧羽沢の豪族であった市川五郎兵衛は、父親の代に徳川家康からもらった開発許可の朱印状を手に、元和9年（1623）信州佐久平に入り、寛永3年（1626）小諸城主松平因幡守から新田開発状をもらい、五郎兵衛新田堰の開さくに着手した。鹿曲川を水源とし、その東側を通り、片倉から布施へぬけ、百沢をまわり矢島から上原に至るこの用水がほぼ完成したのは、4年後の寛永7年（1630）であった。山をぬけ、沢をわたるこの水路は、風雨で破損することも多く、毎年改修することを余儀なくされた。現存する水路跡は改修後の部分も多いが、初期の掘貫（トンネル）なども残り、のみあともあざやかな、近世初期の高度な技術を見ることができる。有名な箱根用水よりも、さらに30数年前に完成しており、箱根用水に優るとも劣らない史跡である。

五郎兵衛用水路跡を鹿曲川の取水口から歩くと、山の斜面に雑木が茂り、やがて眼下に田や集落が一望され、水番の願いをこめた水神社や、水路を見下す大日如来も見られ、金掘技術の掘貫や、つき堰・乗掘堰の技術にも出合い、私たちは近世農村の世界にひきこまれてしまう。